
滲んだ世界で、見えない言葉を。

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滲んだ世界で、見えない言葉を。

【Nコード】

N4161Z

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

休職し、精神科に通う俺と、不登校気味の彼女の物語。

細かい説明を省いている部分もありますので、各々の解釈で楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

俺はあの時、どんな顔をしていただろう。もしかしたら、笑っていたかもしれない。

高校二年の冬、両親が死んだ。殺人事件だった。

見ず知らずの人間に襲われた母、それをかばった父。二人とも、ナイフで刺されて死んだ。犯人の動機はいたって簡単。『誰かを殺したかったから』だ。それ以上でも以下でもなかった。

通り魔による殺人事件として、しばらくの間テレビで報道された。

路頭に迷う、という表現は間違えているかもしれない。頼れる親戚なんていなかったけれど、頼れる大人が周りにいたことは確かだ。大人は、独りになった俺を支えてくれた。けれど、両親を失ったショックは大きかった。どうして俺の親が死んだんだろうと、いつも考えていた。

俺の前を歩いている女性の後ろ姿を、ぼんやりと眺める。歩きにくそうなヒールを履き、のんびりと歩くその姿を。……どうしてそんなに、無防備に歩けるんだろう。この前、通り魔のことが報道されていたはずなのに。

俺は猫背で歩き、常に後ろに怯えながら過ごすようになった。

あれはいつだったろう。今思えば、両親が死んでから二週間も経っていなかったかもしれない。彼女が、そう言っていたから。

あの日は、とても寒かった。

公園のベンチがやけに冷たかったことだけ、何故か鮮明に覚えている。

気づけば俺の側に、小さな女の子が立っていた。三、四歳だろうか。彼女は俺の後ろを見上げて、無表情に近い笑顔で言い放った。

「おとーさんとおかーさん、うしろ。なってる。ごめんって」

それだけ言うと、少女はどこかへ行ってしまった。

どうして、このことを忘れていたんだろう。

ずっと忘れていたんだ。

俺も、彼女も。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4161z/>

滲んだ世界で、見えない言葉を。

2011年12月14日11時54分発行